

「仰げば尊し」

野瀬 隆平

「仰げば尊し我が師の恩……」

三月になると、ふと心に浮かんでくるメロディーとこの歌詞。卒業式でのこの歌が懐かしく思い出される。

長い間、作詞・作曲が「不詳」とされていたが、2011年になって、一橋大学の名誉教授である桜井雅人さんが、その出所がアメリカであることを突き止めた。1871年にニューヨークで出版されたある曲集の中に、この曲を見出したのである。曲名はSong for the Close of Schoolで、ずばり卒業の歌だ。作詞者はティモシー・H・プロスナンと明記されているが、作曲者については、H.N.D.とだけ書かれている。

メロディーは我々が知っているものと全く一緒である。楽譜を見ると、「今こそ別れめ」「め」の所に、フェルマータの記号がふられている点も同じだ。

ただし、歌詞には違いが見られる。学友との別れを惜しむ詞はあるが、恩師に対する感謝の念は歌われていない。明治時代、日本に導入する時に加えられ、しかもそれが歌詞の冒頭に持ってこられたことから、時代の背景を察することができる。

日本の卒業式で、ほぼ例外なく歌われてきたこの歌も、いつの頃からだろうか、あまり歌われなくなった。我々の年代の者にとっては、寂しい気がする。

ところで、この「仰げば尊し」が、未だに卒業の時に歌われているところがある。それは、台湾である。ほとんどの学校の卒業式で歌われているという。日本の統治時代に持ち込まれたものが、今でも歌い継がれているのだ。

台湾での歌の題名は「青青校樹」（チンチンシャウチュ）。歌の冒頭ではないものの、恩師への感謝の気持ちが歌われている点は、日本の歌と変わらない。

大きく違うのは、日本の歌詞には「身を立て名をあげ」と立身出世を目標に励めと言っているのに対して、「青青校樹」では「民主共和 自由平等 農工兵商について努めよ」とある。個人の立身出世よりも公が重んじられていることがよく分かる。

アメリカに端を発した歌が日本を經由して今なお台湾で歌い継がれているのである。

参考 「二木紘三のうた物語」 二木紘三